

「メディアの役割は第一に『権力の監視』だ」

2017年02月04日

『週刊金曜日』の2月3日号に、下記の私の原稿が「投書」欄に掲載された。

米国のオバマ前大統領は1月10日、退任演説を行なった。彼は「Change（変革）」「Yes, We Can（私たちはできる）」をキャッチフレーズにして当選した初の黒人大統領で、変革が期待された。オバマ氏は在任の8年間、アフガン・イラク戦争の後始末、リビア空爆、IS（「イスラム国」）掃討に関わる戦争、リーマンショックの金融危機からの再生、医療保険制度改革（オバマケア）、銃規制、警官による黒人射殺などの課題を背負われた。イランとの核合意、キューバとの国交回復は評価されている。既成の政治勢力に抑え込まれ、期待されたほどの変革は達成できなかったが、正義と平和を追求する夢を残したことは功績だろう。

退任演説で「民主主義」を求める言葉は聴衆の胸を打った。「私たちが恐怖に屈したとき、民主主義は崩れる。民主主義は当然あるものと見なせば、必ずその存在が危うくなる」。民主主義は異なる考えや立場の人々を受け入れ、共にあることを不断の努力で模索し続けることである。大統領トランプ氏を強く意識した演説で、トランプ氏が反対するオバマケアや温暖化問題にも触れていた。

トランプ大統領は当選後、一方的なツイッターばかりで発信していたが、11日、400人の報道陣を前に始めて会見を行なった。不動産業で成功した経営手腕を用いて、米国経済を回復する国家運営をするという発言であった。「海外に生産拠点を移す企業には高い関税を課す」「私は最大の雇用創出者となる」。彼は気に入らない報道をしたメディアを「偽ニュースだ」と罵倒し、発言を封じた。都合の良い者を味方とし、都合の悪い者を敵と見なす、二分法の対処であった。

一方で、米国の女優メリル・ストリープ氏はゴールデン・グローブ賞の受賞式で、トランプ氏が障がいのある記者の真似をしたことを鋭く批判した。心が打ち砕かれたと言い、「他人への侮辱は更なる侮辱を呼び、暴力は暴力を扇動する」と語った。ストリープ氏が語るように、社会的弱者の尊厳が守られるところに真の民主主義がある。

トランプ大統領は就任後、「大統領令」を連発している。メキシコ国境の「壁」建設もおかしな話である。中でも、中東、アフリカの7ヶ国の人々を入国させない大統領令は、米国はじめ世界から抗議を受けている。空港では、入国できない人々でごった返している。米国は移民の国であり、多様な民族が相互に関係し合って豊かで、エネルギー豊かな国を形成してきた。トランプ大統領は選挙公約を実施する、また、テロから米国民を守るための一時的な措置であると言っているが、特定の国、特定の宗教をまとめて排除することはあってはならないことである。司法は早速、憲法違反として法廷手続きを始めている。米国の司法の対応に日本の司法の行政追認とは違うと敬服する。米国のメディアは権力監視の視点は鋭い。これから、トランプ大統領の諸々の政策を追求していくだろう。

英国のメイ首相は、トランプ大統領と意気投合しているような記者会見をしていたが、彼女もトランプ大統領の措置に反対を表明している。安倍首相は国会で「コメントする立場にない」と答弁した。人種、宗教差別に「ノー」と言えない首相に人権尊重を期待することはできない。日本のメディアも米国に倣い、権力の監視を十分に果たせるように機能してほしい。「壁」を作ることは、歴史的に敗北していくことを知るべきである。壁を取り去り和解を模索し、低くさせられている人々を高めるところに、歴史の進展がある。